

10月11日「永遠の住み家」Ⅱコリント5：1～10

今日は神学校日、献身者を覚える日です。今年はコロナの影響もあって、神学生に限らず、かなり厳しい状況に迫られている大学生は本当に多いようです。関学神学部大学院1年の弟の話では慣れないインターネットを介しての授業や、キャンパスに通えないことはもちろん、親の失業などで学費が払えなくなったり、学費のためにアルバイトをしたくとも出来ない学生もいて、ある調査によると20%もの学生が退学や休学を考えているとのこと。学校側も対応に苦慮されていますので、本当に一緒に神学校のために祈りたいと思います。

さて、今日はパウロがコリント教会に宛てた手紙を読みましたが、そこにはパウロの死生観が現わされていたように思います。パウロを含め、初期の教会の人たちは終末がすぐにやってくると考えていました。(もしかしたらほんの数年後に) ミケランジェロの『最後の審判』が有名ですが、復活し、天に昇られたイエスが、もう一度この世界にやってこられる、その時には裁判官イエスの前でそれぞれの生き方によって裁きを受けるという終末です。「10節 わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。」パウロも初代の教会の人たちも、その終末にリアルな希望を抱いて、必死に地上での歩みを生きていたのです。

パウロは今日の手紙で、地上の住みか、今の私たちの地上での生活を「幕屋」だと呼んでいます。簡易式で移動は楽でしょうが、大雨や大風が来たら困ってしまいます。多分この比喻はイスラエルの人たちと神さまの歴史も表しています。イスラエルの人たちもエジプトを脱出して、カナンに定住するまでは40年間、荒れ野をさまようテント暮らしを余儀なくされました。それが、カナンに定住して、国を作り、サウル、ダビデと二人の王を経て、ソロモンの時代によく神殿を建てるのが叶ったのです。私たちの人生も同じように、荒れ野を不安定な幕屋でさまよふのに似て、時

に苦しく、不安なものです。パウロの伝道生活も決して楽ではありませんでした。病に苦しんだり、投獄されることもしばしばありました。そのことはこう表現されています。「2 節 わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。」

けれども、パウロは私たちがいつかこの苦しみから解放され、救われるとき来るとも確信していました。「1 節 わたしたちの地上の住みかである幕屋が減びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。」パウロはこうして私たちに永遠の住み家が天に与えられることを、死ぬはずのものが「命に飲み込まれる (5:4)」と表現しています。私たちは、自分が何か偉いから、自分が何か優れているから、永遠の住み家を与えられるわけではありません。神がただ私たちを愛してくださっているから、イエス・キリストを救い主だと告白することによって、神の聖霊が注がれるのです。キリストの新しい命に飲み込まれるのです。「4:16 だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」先週、私たちの教会のある高齢の方が神さまに向き直された話をしましたが、神の命に飲み込まれること、神によって新しくされることに年齢制限はありません。いつも、神さまは私たちに働きかけ、日々新たにしてくださっているのです。

今日の御言葉で私は 10 節が気にかかりました。「わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならない」最後の審判です。冒頭にもお話ししましたが、これは、パウロや初代の教会の人たちにとってリアルに間近に迫った出来事だったのです。そしていつもその時に備えていました。だからパウロはこう語ることができます。「4:18 わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」目に見え

る、この世の栄光や財産や地位を求めて生きるのではなくて、目に見えない天にある永遠の住み家を求めて神の前に善く生きようと努めるのです。誠実に生きるのです。そして「9 節 ひたすら主に喜ばれる者でありたい。」と願うのです。

先月の『信徒の友』は興味深い内容でした。明治期のキリスト者の創業者たちが特集されていました。白洋舎、ライオン、グンゼ、森永製菓、100年以上も続く大企業の創業者がクリスチャンで、中には企業理念にキリスト教精神が採用されている会社もあるそうです。こういう話を聞くと、「クリスチャンになれば有名になれる。地位が手に入る。人生の成功が待っている」そう思われる人もいるかもしれません。実際、そういう伝道の仕方をするキリスト教もあります。でも私はそうは思っていません。今日のパウロの言葉を取っても聖書にはこの世での成功の仕方が書いてあるわけではありません。むしろこの世での成功に目がくらむのを避けるように示されています。この特集でライオンの創業者小林富次郎氏の記事が印象的でした。彼はしばしば「キリスト教で本当に商売ができますか？」と問われたそうです。明治の初期くらいにはまだ今のように消費者保護や企業倫理という考え方もありません。粗製乱造、模造品、二重価格での販売が横行し、「嘘をつかないで商売が成り立つのか？」という疑問が湧きあがることに何の不思議もない時代だったのです。彼のこんな言葉がありました。「私がクリスチャンの実業家だということが知られるようになるにつれ、私は商売仲間の中で大きな信用を勝ち取ることが出来るようになりました。この信用こそ、大事な資本となるのです」これは紹介されていた他の企業にも共通していたと思いましたが、雑で適当な商売がまかり通っていた時代に、それでも誠実さで信頼を得て、隣人愛の精神でもって誰かの助けになる商品を生み出した企業が今も残っているのではないのでしょうか。そこには、目に見えるものではなく、見えないものに目を注ぎ、主に喜ばれる生き方を模索した人々の姿があるように思います。そこには地上を超える永遠の住み家を確信しつつ、この世で誠実に生きた人々の姿があるように思います。

今日は神学校日ですが、そういう意味ではキリスト者は牧師のみに関わらず全員が献身者です。「洗礼を受けても生活は変わらない。でも人生は変わる！」ある本の一節ですが、私たちは洗礼を受けたその日から、神に喜ばれる生き方を目指して歩む献身者となります。今日も皆さんお忙しい中、奏楽、受付、会計、お花、様々な奉仕と献身をしてくださっています。礼拝に出席するということが自体が神の招きに応じて献身したということです！教会で奉仕くださるときに、もちろん互いに感謝し合うけれども、皆さんの心にはきっと神さまに喜んでもらいたいという気持ちがあるはずだ。皆さんのなさる一つ一つを神さまはきっと見ておられる。これからもパウロと同じような気持ちで、「ひたすら主に喜ばれる者でありたい。」と生き方を奉げていきたい。天にある永遠の住み家を目指していきたい。